PHAYAO レポート 2013-01（大学生・現地レポート）-①

徳島大学、山口県立大学、現地大学 CRRU（2013.8/19～31）

「地域の自立を目指した支援活動」から学んだ人とのつながり

徳島大学大学院 総合科学教育部博士前期課程 2 年　チミドルジ ツォルモン

今回、タイでのスタディツアーに参加して、NPO 法人シャンティ山口のシャンティ学生寮運営事業と北タイに住む山岳少数民族モン族の人々の生活自立支援事業を、自ら体験させてもらった。様々な活動を通じて、人のつながりの大切さを学ぶことができたので、ここに紹介したいと思う。

最初にシャンティ学生寮で三日間中学・高校生たちと一緒に宿泊して生活を共にして、いろいろな地域から集まったモン族の子供たちと交流した。これらの体験を通じて、NPO 法人シャンティ山口が、親のいない子共や貧困などの事情で学校に通えない子供たちを支援するための活動として、日本国外務省「草の根無償援助」などの支援を受けながら、1997 年にシャンティ学生寮が建設されたことを知った。ここに入るには、入寮条件を満たしているかどうかの面接がある。定員がわずか 50 人の寮なので、入寮するのは簡単ではないようだ。

田植えのお手伝い

郊外学習に同行

食事の準備

学生たちはみんなそれぞれのグループに分かれて、夜明けの 4 時から早起きて、料理、掃除、農作業などの役割分担をしていた。

他人に迷惑をかけないように、それぞれの学生が自分の担当している分をしっかりとこなしていた。このような生活を通じて、勉強以外に、自分で生活する力や、グループの中で共同生活するための人間力が身についていくと思われた。

毎日がこのように忙しい生活の中で、学生たちは思ったよりオシャレで、ドレスアップに関心を持ち、集まって共に音楽を聴いたり、一緒に歌を歌うなど、思考能力が高く、いろいろな才能ある子供達が集まっているように思われた。

その次に、シャンティ山口の山岳民族生活自立支援事業の場である、ホイプム村を訪問して、ここに住むモン族の人々と交流をおこなった。３日間村の人の家にホームステイをさせてもらい、村の現実の生活を体験する機会を得た。

ここに住むモン族の人たちは、1975年代のラオスの内戦の結果、北タイのこの地域に逃れてきた難民の人々とその末裔達だ。

村人と話をする中で、偶然にある興味深い事実を知った。それは、モン族の子供は生まれる時に、仙椎の部分に青い点（蒙古斑）が現れるということである。村人は“我々の顔はモンゴル人とは似てない”と話していたが、今回訪問したモンゴルの２人の学生に興味を持って、「モンゴルに行って見たい」という話や、「モン語とモンゴル語で似ている発音を発見したか？」とか、また「モンゴルとモン族で同じ習慣があるか？」などいろいろな質問を、私たちに投げかけてきた。

これに関連して、さらに興味深いことを知った、それは日本に帰る直前に、像のショーを見るために、チェンマイのエレファントキャンプへ行った時のことだ。私は、偶然にそこに置かれていたパンフレットを見て、驚いた。

そこには、「北タイに住むモン族と言う少数民族は、元々はモンゴル人であり、モンゴルの地域が寒くて住みにくかったために、南へ移民した民族の末裔である」と書かれていたからだ。

私は、今回訪問した村人と、このような形の人のつながりがあるとは、本当に信じられなかった。

ここで、シャンティ山口が行っている最近の地域支援の取り組みを紹介したい。

それは『アグロフォレストリー・プロジェクト』という取り組みである。村の農業センターが中心となり、これまで組み換えトウモロコシのみの単一栽培農業であった畑地を、複合農業化しながら森林生成を目指す取り組みである。

具体的な方法としては、今あるトウモロコシの間に、換金作物を少しずつ植え、年々その数を増やし、将来的には、組み換えトウモロコシと入れ替えるという計画である。

その換金作物の候補となっているのが、コーヒー、マンゴー、ゴム等であり、これらの中から、村人自身が２～３種類選び、自分の耕作地に植えて組み換えトウモロコシと置き換えを進め、次第に復合化していく。

もうひとつの地域支援は、村人の各家にエコトイレとシャワー室を設置する取り組みであり、昨年村の全戸に完成した。これにより、村人は快適で健康的な生活ができるようになった。

それにより、若者が村に戻り家を建てたり、結婚したりして、世帯数が 47 世帯から 62 世帯まで増え、村人の人口構成が若返った。
これは、シャンティ山口の活動の最大の収穫だと思われる。

最後に、モン族の村での生活は、見ての通りガタガタの山道、単調な農作業、豊かではない食事など、とても大変だと思われるが、もしこれをモンゴルの遊牧民の生活と比較すると同じ硬貨の両面のようだと感じた。
モンゴルにおいても、田舎では、トイレも、電気もなしで生活している人々が沢山いる。しかしながら、この生活様式は、少なくとも現在の日本では見られない。

現在の日本とは異なった人間の生き方を体験できたことは、私に取って自分の知識と視野を広げる絶好のチャンスだったと思う。佐伯さんはある時に「モン族の農作業のような生活様式は、昔の日本人の生活を思い出させる」と発言されていた。

私は、思わず「このスタディツアーの重要な意図は、ここで存在するのだ」と感じた。
今回のスタディツアーにより、地域社会の自立を目指した効果が高い支援活動のあり方を学ぶことができた。

私は、人のつながりを基本としたこのような支援活動を、将来母国モンゴルの地域で始めたいと思う。

モン族

VS

モンゴルの遊牧民

— チミドルジ ツォルモン —

～人と人～

シャンティ山口から学ぶ本当の支援のあり方

徳島大学　総合科学部人間文化学科　1年　門田彩加

はじめに

今回のスタディツアーを終えて、あらかじめ私が用意していたテーマを変えて支援のあり方について書こうと決めた。それは、佐伯さんと出会って、シャンティ山口についてのお話を聞いたり、佐伯さん自身の支援についての考えを聞いたりして私の興味が変わったからだ。そして、本当の支援とは何かについて私自身がもっと学ぶ必要があると感じたからである。

本当の支援とは

国際支援、難民支援と聞いて何が思い浮かぶだろう。たいていの人はおそらくJICAや青年海外協力隊、ユネスコについてのことをあげるのではないだろうか。では、実際に誰が誰のために何をどのように支援しているか知っている人はどれほどいるのであろう。おそらく、漠然としか知らない人がほとんどであろう。私も、もちろんスタディツアーに参加するまで、そのほとんどの人間のうちのひとりであった。

佐伯さんには活動を通して、多くのことを考えさせられた。例えば、「みんながよく知る支援団体はどうしてそんなに有名なのか。」という問題である。たった何十円、何百円で救える命があると募金を募っておきながら、何千万、何億というお金を広告に費やしているのである。また、事業規模が大きくなればなるほど人件費などがかさむというのも現実である。しかし、その一方で、多くの人々の国際協力を知るきっかけや参加するきっかけになっているというのも事実である。今、私には、はっきりと本当の支援とはなんたるかについて一概に述べることはできない。

シャンティ山口の活動を通して

今回はおもにシャンティ寮とホイプム村でシャンティ山口の活動に参加させて頂いた。活動への参加を通して佐伯さんの支援について思いや考えが反映されていると感じた。

- シャンティ寮：経済的な事情や地理的な問題によって通学が困難な小学生・中学生・高校生を応募して約50名が共同生活をしている。

  私がシャンティ寮を訪れた時に不思議に思ったのは、日本人の支援者が全くいなかったということである。施設は完全に現地の方が運営していたことに驚いた。また、経済的にも自立に近づくように努力をしていた。子供たちは自給自足に繋げようと米を植え、畑を耕し、家畜の世話を毎日こなしている。毎朝、当番の女の子たちは3時、4時くらいに起床し子供たち全員の朝食を作る。同様に、彼女たちは夜ご飯も作る。皆が助け合いながら、生活しているのである。

- ホイプム村：ラオス内戦によって、住んでいた所を奪われ、タイの山岳部に移り住んだモン族の生活支援。アメリカの大企業「Ａ社」の遺伝子組み換えトウモロコシから換金作物栽培への転換の農業支援を行っている。

　私には、ホイプム村の住民は生き生きとしているように感じた。佐伯さんは昔の日本の様だと言った。
　始め、3 泊 4 日のホームステイに私はあまり乗り気ではなかった。どんな不自由な暮らしを共にするのだろうかと不安で一杯であった。
　しかし、ホイプム村は水道設備やエコトイレのきちんと整ったところであった。
　食事もおいしく、水浴びもできる、ほとんど何不自由もない、最低限の生活のできる所であった。

　ステイ先の方々は私にとても良くしてくれた。
　タイに来てから一番安心して、眠ることができた気がした。
　人々の生活様式だけではなく、人の暖かさに触れた充実したホームステイであった。

　村民は皆、働き者であった。朝早くから畑に行き、一生懸命に農作業を行っていた。
　遺伝子組み換えトウモロコシはあまり高い値では売れない。
　それゆえ、単価が安いと量で稼ぐしかない。
　どうやって植えることができるのだろうと不思議に思うほどの急勾配な山の隅々にさえトウモロコシは植えられていた。
　トウモロコシのための除草剤や肥料は急勾配な山には適さない。なぜなら、度々降るスコールで流れてしまうからだ。土地がやせるとトウモロコシは育てられない。そのためにタイ王国が所有する山を切り開いてきた。これ以上の山の開拓は禁じられているようだ。

　シャンティ山口はトウモロコシ栽培を換金作物（マンゴー、ラムヤイ、マカダミアナッツ、コーヒーなど）栽培に転換させる支援を行っている。
　村民は自分たちで何を植えるか試験し、勉強会に参加し、シャンティ山口の力を借りながら自分たちの意志で転換を進めている。

シャンティ山口の活動にみる佐伯さんの心意気

自立するための支援

本当の支援とは、いつまでも続く終わりのない支援ではなく、できるだけ早く地域の人たちが自立できるように支援するということ。

　シャンティ寮の日々の運営には日本人の支援者はいない。運営資金をもらっているのは確かであるが、支援金に頼るのだけではなく自分たちで資金面においても自立できるように農業を行っているのである。年々、運営資金は右肩下がりだという。

また、ホイプム村でのトウモロコシ栽培の転換支援はトウモロコシ畑であった土地の半分が換金作物栽培に切り換わったら終了するという。

「最後まで支援を続けると自分たちの力で自立するという気持ちがなくなる。自分たちの問題なのだから自分たちでするべきであって私たちはそのお手伝いをしているだけ。」と佐伯さんが言っていた。

私はその言葉を聞いてそれが本来の支援だと感じた。食べ物やワクチンを提供するだけの支援は、本当の支援ではない。

なぜなら、現地の人は食料やワクチンの提供を待つことしかできないからだ。

それとは違い現状打開の方法を教えるということが一番の支援なのである。

終わりに

佐伯さんをはじめとする、シャンティ山口の皆さんのおかげで貴重な経験を積むことができました。本当にありがとうございました。

素敵なお仕事をされている佐伯さんたちに憧れます。

わたしも今回の学びを活かし、大学で多くのことをどんどん吸収して、また必ずシャンティ山口を訪れたいと思います。

これからも頑張ってください。日本から応援しています。

～ステイ先のお母さんとお父さんと～

-かどさや　こと　門田彩加-

～２０１３年８月タイスタディツアー体験で学んだこと～

徳島大学大学院 総合科学教育部博士前期課程２年
モロムジャムツ　エンヘジャルガル

今回のタイへのスタディツアーは、私にとって全く新しい世界で、以前のイメージより違ってまるで別世界でした。

先生方々のお蔭でツアーの６人のメンバーの一環として受け入れていただき、また掛け替えのない貴重な体験をさせていただき、心から感謝を申し上げます。

可愛くて無邪気な笑顔を見たら心が癒される

スタディツアーの時にシャンティ山口 NPO 法人から提供されている様々な協力活動について詳しくは、既にホームページに載っているので、本レポートを通じてシャンティ山口 NPO 法人の実践活動について長談義をせず、たったの自分が感じたことを私の教科書に限られた日本語を用いて、メッセージとして表現させていただきたいと思います。

さて、CRRU（チェンラーイラチャパット大学)、シャンティ寮、またホイプム村の三か所がスタディツアーの対象となった。

まず、チェンラーイ大学の伝統医学部を訪問し、学長や先生たち親切に迎えられ、医学部の活動、また伝統薬や伝統医療について最初から最後まで非常に分かりやすく紹介していただき、将来の協力活動について話し合った。

この後、本大学の英語教育学部の学生たちと英会話交流を通じて、それぞれグループに分かれ、自分の国の特徴的な生活や食文化についてプレゼンテーションを行った。

英語を第二必修外国語とする日本、タイとモンゴル、この三つの国の学生たちが実践的に英語を用いて、文化交流活動を行うことが出来たのは効果的であったと思われる。

活動後グループごとでお互いの連絡先を交換したり、フェイスブックで友達になったり、とても興奮な瞬間であった。

このことから見ると、上のような実践体験は将来の国際交流の発展に直接影響が与えられることが期待される。

二番目に訪問したのは北タイに位置するシャンティ寮。

そこで中高生たちと共同活動を実施した。奨学金をもらいながらシャンティ寮で生活をする彼ら、蜂のような働き者で、しかも寝る時間はわずかの４－５時間ぐらいだろう。

朝早く起きてから用意することは山ほど多く、学校にいる時間は８時間ぐらい、寮に帰って来たら毎日のように宿題、スポーツ、畑、農作業、またハンドクラフトや家事などの忙しい一日が続く。

そんな小さな体の実力よりはるかに超えている、そんな忙しい一日を過ごしている。

5:00～	起床、それぞれの当番にあたる （市場へ買出しに出る当番は４時に起床）
7:00	水浴び、着替え
7:30	朝食 登校
16:00	下校
16:30～	農作業
17:30～	宿題、自由時間（炊事当番は夕食を準備）
18:30～	夕食・水浴び
20:00～	宿題、自由時間
22:00	消灯

学生たちの一日のスケージュル

しかし、私の母国であるモンゴル国は発展途上国の一つであり、貧しい生活を送っている人々はまだまだ少なくない。

その上に、最近は環境問題や教育問題などの様々な問題が起こりつつある。と言っても、私がモンゴルにいた時は、家を離れたことが一度もなく、田舎の生活を経験したこともあんまりなかった。

なので、シャンティ寮の子供たちと短い間でも、また言葉もうまく通じなくても心の底で接することが出来て感動するだけだった。

実は、私の家は貧しくはなかったが、豊かでもなかった。

この子供たちと比べると、両親と兄弟に包囲され、豊かな生活をしている私たちが本当に幸せだなと改めて感じた。

しかし、彼らは幸せではないということじゃないよ。

こんな深い思いをしたもう一つの理由は、タイの北部に住んでいるモン族の家に三日間ホームステイをさせていただいた時のこと。
ホームステイの前の想像の通りでは、正直に言うと、「まさかの三日間、長い」と思っていた。
なぜなら、ガイドさんからの案内によると様々な病気や恐ろしい動物に刺されないよう警告されたからだ。
その恐れていた三日間はあっという間に終わってしまったのだ。皆、無事に、しかも元気そうで楽しい思い出を沢山出来たようだった。

私がホームステイした家には、お母さんが３歳の息子と一緒に二人で住んでいた。一日目から三日目までお母さんが家を出ずに、私と一緒にいてくれた。
私は思った、「お母さんは仕事をしてないんだ、ご家族の皆さんはどこにいるのかな」と。
そして、英語で話しをかけてみたら、驚くことに私の言うことを理解してくれてビックリ仰天。

その後、「お母さんの名前が「ジャさん」と言う、３３歳、私と同じぐらいなのにもう結婚されて、こともが三人もいる、上の二人は町の学校に通っている。
また、ご主人の方が生活が苦しいあまりに、他の１０人のご主人と一緒にイスラエルまで出稼ぎに行かれた」と話す彼女、また愛するご主人を遠くから応援しながら時々ため息をつく姿をみて、私がうらやましく思った。
人生って愛だね。
世界のどこに住んでいても「愛の力で楽しく生きていけるんだよ」とどこかで聞いたような・・・。
私の為に畑の仕事に出なかったようだ。誤りたい気持ちでいっぱい。

「ジャさんと３歳の息子」と私

では、最後としていくつかのことを私の新しい友達に伝えて頂きたいと思います。

・刺繍を教えてくれたこと、これからも続けていきたいと思います。
新しい伝統的な模様を教えてね。

・シャンテイ寮とホストファミリの料理はとてもおいしかったです。
私が、モン族だったからか、お肉を沢山食べさせてもらいました。

・ジャさん！お家に蛇を見たこと、本当に怖かったけど、なぜか私が全く声を出さなかった。
あの時は私が大きな声で叫んで、逃げ出したかったけど、ジャさんの気持ちを考えたら我慢することが出来て良かったと思う。

・シャンテイ寮の学生たち!　バス―カラオケ―ダンスクラブはとても気に入ったよ。
初めてそんな素晴らしい楽しむ方を知りました。
ダンス、歌をはじめ、なんでもできるあなたたち、将来素晴らしい人になってくださいね。
また、いつかどこかで再会しましょう。お元気で。

・ジャさん、一緒に寝させてくれてありがとう。
また、ジャさんからお手紙をいただくと喜びます。
これ以外にも、伝えたいことはたくさんありますが、このあたりで終わりにしたいと思います。
いつまでも忘れられないいい思い出が出来た私が一番幸福、わくわく・・・・。

―モロムジャムツ　エンヘジャルガル―

エコトイレを通してホイプム村で考えた事

徳島大学医学部医学科１年　薮野淳也

1. 始めに

私は今回のスタディツアーに参加するにあたり、ホイプム村で長年問題になっていたという「トイレ」に注目することにした。それまでのホイプム村では、糞尿は垂れ流し状態であり、衛生的に非常に悪い状態であり疫病も蔓延したと言う話を聞いた。それがトイレを作る事によって、村の人々の生活は向上し、さまざまな福次的効果も現れるようになったという。佐伯さんのお話を直に聞き、村でのホームステイを通して考えたことをここでまとめていきたい。

2. 佐伯さんのお話を聞いて

何よりも大事なことは、お金をかけないということである。ホイプム村の人々はタイ人の十分の一以下の年収で暮らしているという事実は、トイレに投資を優先するということを許さないであろう。

そこでシャンティ山口の発案した手作りのエコトイレが活きてくる訳であるが、重要なことは自分たちでも作る事が出来るということだ。

トイレだけではなく全ての分野において佐伯さんが強調していた「全部やってあげるのではなく、自立できるようにしてやる」という考えはモン族の人々がこれから自分たちの村を自分達の力で作り上げて行く際に必要不可欠である。

昔日本はアフリカ諸国に井戸を掘ってあげたが掘り方は教えなかったと聞いた事があるが、正にこの「自立」という考えは支援・援助をする際の根本的な考えとなるであろう。

さらに排泄物を使ってガスを発生させ保育園や家庭で使える、流した水を奇麗にする装置が備わっていることにより、お金をかける事なく生活のための資源が得られる。

そもそもトイレという排泄物を処理する装置は家屋と同じくらい重要な物であると思う。

そこがないがしろにされることは、より良い生活が出来なくなると言う事を意味しているのであると思う。そう考えるとシャンティ山口の皆さんはホイプム村のモン族の人々に生活の基盤となるものを提供、そして自分達で自立できるよういい教えてあげたのであると思う。

これは農業改革と同程度で大切なことであるように感じた。

3. ホイプム村で実際にトイレを見て

私が初めてホイプム村のトイレを見て、そして使用して思った事は意外にも清潔に保たれているということであった。前の村のトイレは写真でしか見た事無いのだが、それらと比べると、シャンティ山口の努力によって村人の衛生管理に対する意識の改革が実をなしているように感じられた。

ガスや野菜を育てるという効果は一般家庭向けとしても設置されていて、ガスに関してはより装置を簡潔にすることで各家庭に供給されている。村人達の生活にとって一番効率が良い選択をする必要があると思う。お金をかけないで時間をかけてガスを得るよりも、今生活で必要なガスをお金で買う方が良い場合もあるであろう。私は外から来た人間なので、残念ながら村の内情を詳しくはわからない。

シャンティ山口の事業はそのような状況を良く見ておこなっていると感じた。

その一方で子供達を中心とする衛生教育にはまだ必要性を感じた。滞在中にいわゆる「立ち小便」をする、親がさせる所を目の当たりにした。どこか茂みに入ってするなら日本でも起こる事であるが、家のすぐ近くでしたり事後に掃除をしなかったりと、意識がまだ行き届いていないと感じられた。村においては用を足す所はトイレであるということを、これからも意識させる必要があるのではないか。特に子供たちへの衛生に関する教育は、保育園という素晴らしい施設があるのだから、簡単なことから少しずつ教えていけると思う。

4. まとめ

エコトイレを実際に利用する生活を通して、シャンティ山口が作り上げたトイレはさらに改良すれば日本でも使う事ができる将来性のあるものであると感じた。

下水道を必要としないので山小屋など過酷な環境において本領を発揮するものであると思う。

その一方で、佐伯さんから聞いたように企業ぐるみで下水道を作ろうとしている都市にニッチを見つけ出すのは難しいのが現状であろう。

しかし都市においてエコトイレを必要とする人々、エコトイレが必要とする環境が揃っているかと言われると必ずしもそうではないであろう。

そう考えると、エコトイレはホイプム村のような環境で、これから先もモン族のような人々のニーズに合わせて発展をしていくべきであると思う。

今おこなっている農業改革が実を結べば、経済的にも余裕ができ、村全体でトイレの改革にも踏み出せるようになると思う。

実際に使ってみて感じた改善できることとして、トイレそのものではなく小屋を少し工夫すればより快適になるのではないかと思った。

モン族の人々は夜目が利くようなので必要ないかもしれない、しかし、電気の無い中でも屋根を少し工夫するだけで光はたくさん入ってくるようになると思う。

そうする事で、懐中電灯を使わずにトイレを使える時間が長くなるなど、少しずつ工夫していくことが出来るのではないかと思った。

そこに彼ら特有の伝統的なデザインなどを組み込んで行けばさらに面白くなるとも思う。

これを私の今後のトイレに対する提言とし、このレポートを締めくくりたい。

— 薮野淳也 —

ホイプム村での太陽電池

徳島大学医学部医学科　中柴徹也

タイ北東部、ミャンマーとの国境に近い山間にホイプム村という少数民族モン族の村落がある。

ホイプム村に住むロンさんのお家に２０１３年８月２６日から２９日まで３泊４日の日程でホームステイしてきた。

煮炊きのため木をくべるかまど。

土間つくりの家。

そして畑での農作業。

昔の日本の農村を想起させる暮らしだった。

ホイプム村へ

タイ第２の都市チェンマイは、国際空港を備えたタイ北部の大都市である。チェンマイから北東へバスで４時間程でチェンカムという小さな街に着く。チェンカムからホイプム村まで行くバスはない。

ホイプム村の村人を支援するＮＧＯ（シャンティ山口）に手配してもらったトラックに乗り換える。

ホイプム村は、チェンカムから山へ向かった上で、泥土の山道をさらに小一時間車をがたがた走らせたさきにある。

太陽光発電

ホイプム村では家は点在しており、家屋はいわゆる掘っ立て小屋で簡素な造りである。

私がホイプム村に到着して驚いたのは、簡素な家屋の屋根の上に太陽光パネルが設置されていることであった。数年前、タイ政府によって支給されたものだという。

実は、ホイプム村ではほとんどの家庭に太陽光発電システムが備わっている。太陽光パネルとインバータとバッテリとから成り、再生可能エネルギーである太陽光エネルギーを利用するすぐれたエネルギーシステムだ。パネルが太陽光を受けて発電すると電流がバッテリへ流れてバッテリを充電する。バッテリに貯められた電気を利用することで、曇りの日や夜間でも電気を使うことができる。

太陽光発電の発電量は、日照状況に左右される。ホイプム村では家は点在しており土地はあまり気味で、日照を妨げる高い建物などない。太陽光パネルを設置する上で日当たりの良い場所を確保しやすいホイプム村は、日照条件に左右されるという太陽光発電の特性によく合っている。

ホイプム村はふもとの町から離れた山間にある。もしも電線を麓の町からホイプム村まで引こうとすれば、多額の費用がかかるのは避けられない。

太陽光発電であれば、システムを運んで設置すればよい。
太陽光発電を利用することによって、コストを抑えつつ電気を山間のホイプム村にもたらすことが可能になった。

家電製品を利用する

太陽光発電によって山間のホイプム村におけるモン族の暮らしは、ここ数年で変わってきている。
たとえば、ろうそくのみに頼っていた夜の明かりは、今やバッテリを利用したＬＥＤ電球にとって代わられた。
携帯電話、テレビ、ＤＶＤ、オーディオ、デジタルカメラなども普及しつつあるという。
ホームステイ先のロンさんは、ＤＶＤをテレビにつなげてモン語の歌謡のＰＶを見せてくれた。
モン語だったのでどのような歌詞を歌っていたのかさっぱりわからなかったが、深いビブラートをきかせた日本の演歌のような歌謡曲だった。
また、散歩に誘われて向かったご近所の家でＤＶＤで映画を一緒に鑑賞することもあった。
他方、テレビでニュースを見ることはあまりなかった。
テレビは情報と娯楽の両方を取り扱うが、ホイプム村の人はどちらかといえばテレビには娯楽を求めているということなのだろう。

テーブルタップで節電

家電製品はコンセントを差し込んでいるだけで待機電力を消費する。
ロンさんの家に設置されている太陽光発電システムの発電容量は１２０Ｗｈ、発電量が限られているので待機電力を消費するのを抑制することが必要だ。
そこで、スイッチ付きのテーブルタップが重宝されている。
オーディオやＴＶなどの電源プラグはテーブルタップに差しっぱなしにして、テーブルタップのスイッチは普段は切っておく。
これで、電源プラグを抜き差しせずに家電製品が待機電力を消費するのを避けている。

ホイプム村での太陽光発電の今後

１２０Ｗｈという発電容量では、冷蔵庫や洗濯機といった消費電力の大きい製品を利用するのは難しい。消費電力の大きい製品を利用するためにホイプム村の人が発電容量の増加を望むなら、太陽電池パネルを増設するのが手っ取り早い。

家庭によっては家電製品を増やして太陽電池パネルを増設する購買力はあるように見受けられた。
もしかしたら、ホイプム村の太陽光パネルは数年後には増設されているかもしれない。
今後、ホイプム村での太陽電池の利用がどう変わっていくのか、興味をひかれるところだ。

— 中柴徹也 —